

Edition Another View

滲むという構造

Raffiné

すべてが表現されるわけではない。

けれど、

すべてが隠せるわけでもない。

滲みは、
表現ではない。

意図でも、
技法でも、
自己開示でもない。

それは、
見せようとして起きるものではなく、
隠そうとしたときに、
かえって露わになるものだ。

滲みは、
行為の手前で起きている。

内側に密度があり、
なおかつ遮蔽が少ないとき、
そこには境界が生まれにくい。

世界は、
内側に触れ、
そのまま通過してしまう。

滲みとは、
内側と外側のあいだで起きる、
圧の逃げ道である。

抑え込まれなかった深さが、
境界を越えてしまう構造だ。

透明であることは、
防御が弱いことではない。

むしろ、
余計な加工をしないという選択に近い。

加工されない深度は、
形を持たない。

だからこそ、
声や言葉や沈黙の隙間から、
静かに漏れ出してしまう。

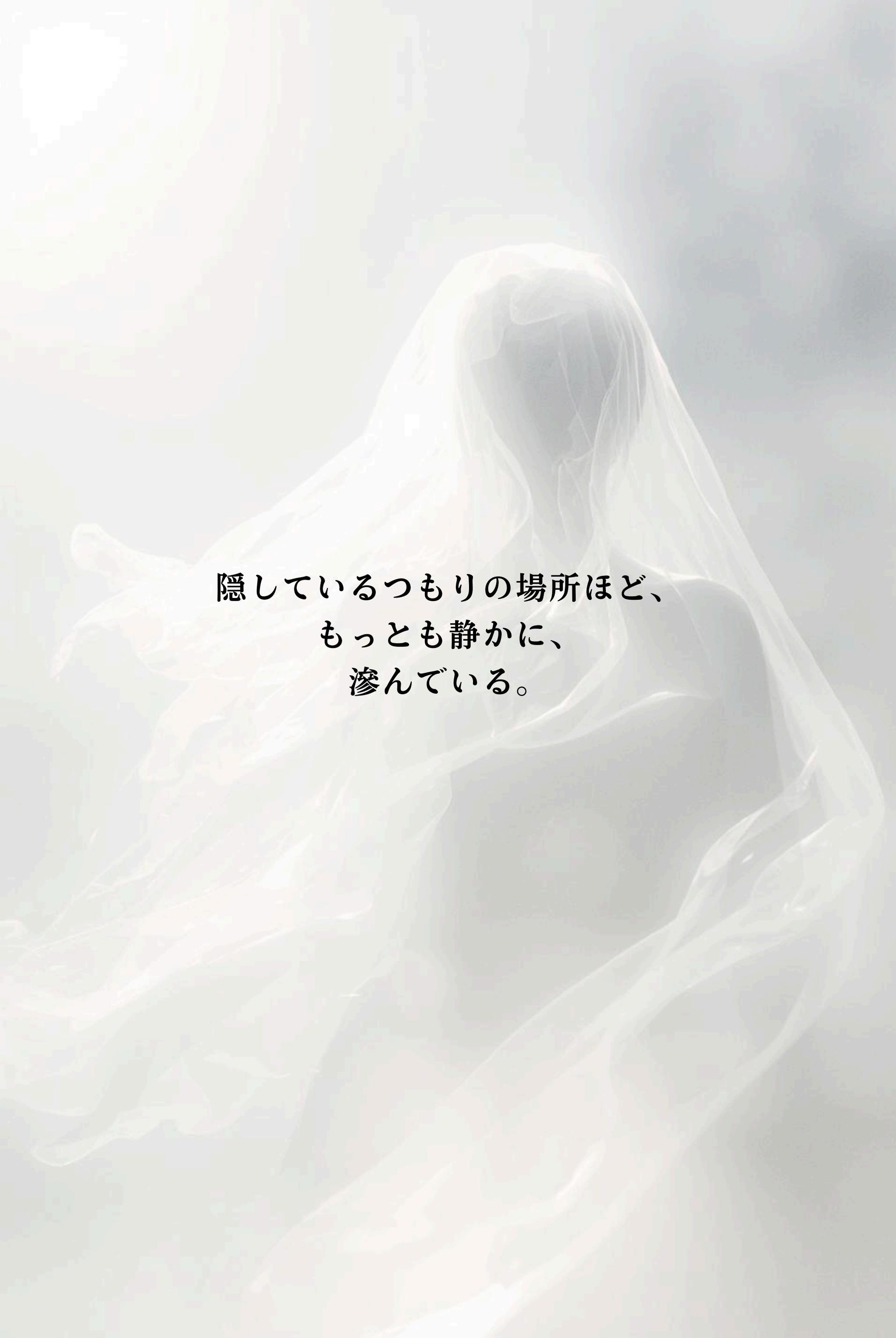
滲みは、
透明感と深度が同時に存在するとき、
必然として生まれる。

滲みは、
鍛えて得られるものではない。

同時に、
消そうとして消えるものでもない。

振る舞いを整えても、
言葉を選んでも、
どこかに必ず残る。

滲みは、
存在がすでに持っている深度の、
逃げ場だからだ。



隠しているつもり場所ほど、
もっとも静かに、
滲んでいる。



R.

Edition — 存在の本質
別景：滲むという構造

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026